

ひと揺れの地震なみに持ちたる蠅叩

藤田湘子

読んだ瞬間「ひと揺れ」を感じる臨場感にあふれた句。予期せぬ揺れに一瞬頭が真っ白になり、あわてて蠅叩に手を伸ばす様が目に浮かぶ。そして、「可笑しい」。

「蠅叩此處になければ何處にもなし」の句がすぐに思ひ出される。湘子は身のそばにいつも蠅叩を置いていたのであろう。蠅の飛ぶ音や視界をよぎる動きに敏感に反応して、半ば条件反射のように蠅叩に手を伸ばしたのであろう日常が想像される。咄嗟のときには普段の行動が呼び覚まされる。地震の軽いひと揺れと、蠅の動きとが作者にとっては、日常の中で同じ危機として体が反応したことが、面白く可笑しく、その分切ない。

「破顔一笑」の句の底に「いとをかし」を見る思いだ。

1985年（昭和60.06.08作）第八句集『黒』 鑑賞・野本京